

令和３年度 第２回立川市ＳＤＧｓ推進委員会 会議録

開催日時 令和４年１月１３日（木曜日） １８時３０分～２０時３０分

開催場所 立川市役所 ２０８・２０９会議室

出席者 [委員] 片桐庸行（委員長）、佐藤良子（副委員長）、枝村珠衣、笹浪真智子
田中準也、寺田良太、中村衣里、樋口通子

[事務局] 栗原寛（総合政策部長）、浅見知明（総合政策部企画政策課長）、
牛山亮太（総合政策部企画政策課係長）、青木祐友（総合政策部企画
政策課主事）、岡本晃一（総合政策部企画政策課主事）
本郷友紀（ＩＫＥＡ立川）

- 議事日程 ○ 開会
○ 連絡事項
１ 国際基督教大学への視察について（報告）
２ 第２回立川市ＳＤＧｓ推進委員会の開催にあたって
３ ＳＤＧｓに係る社会的な傾向や地域の現状について
４ 「地域や各団体で共通する課題」に対するアイデアや意見の交換
５ 「立川市ＳＤＧｓ推進報告書（仮称）」の作成について
○ 閉会

会議録

○開会

（委員長）

定刻となりましたので、令和３年度第２回立川市ＳＤＧｓ推進委員会を開催いたします。前回に引き続き委員長を拝命しました公益社団法人立川青年会議所の片桐です。よろしくお願いたします。

まずは、この間ですが、国際基督教大学の方へ視察に行かせていただきましてありがとうございました。とても勉強になりまして、結構カルチャーショックがありました。今後何かに生かせればと思っております。

今日は議事が大きく分けて３点ありまして、皆様からの活発なご意見いただきたいと思います。ご協力のほどお願いいたします。また、前回に引き続き副委員長は、佐藤委員にお務めいただきます。ご挨拶をお願いします。

（副委員長）

皆さんこんばんは。寒い中、本委員会に出席していただきありがとうございます。東京都もオミクロン株による感染者が増えていて、ワクチン接種も３回目が始まっています。昨日、立川市役所に来たら、たくさんの医療従事者の方が並んでいて、３回目のワクチンを接種していますとのことでした。私も３回目の接種の案内が届きましたが、接種を受けてない人にも勧めて、自分の身は自分で守るような努力はしていきたいと思っています。

(委員長)

そうですね。都内も新規感染者数が3,000人を超えている状態なので、皆さん体調に気を付けていただきたいと思います。

本日は、皆さまご多用中にも関わらずご出席をいただきありがとうございます。また、誠に残念ながら、立川市商店街振興組合連合会の山本委員は、業務のため本日ご欠席となります。よろしくお願いいたします。それでは議事に入る前に、事務局より連絡事項について、お願いします。

○連絡事項

(事務局)

皆さんこんばんは。事務局の企画政策課長の浅見です。まずは、事務局についてお知らせします。

事務局については、前回と同様に、立川市総合政策部企画政策課が務めさせていただきます。また、公益社団法人立川青年会議所さまとI K E A立川さまより、事務局支援をいただいております。本日は、新たにI K E A立川さまからローカルマーケティングをご担当される、本郷様にご出席をいただいております。本郷様より一言ご挨拶をお願いいたします。

[事務局支援挨拶]

(事務局)

それでは続きまして資料の確認、会議の公開、会議録の取扱いについてお知らせいたします。

資料は、次第に記載しております通り、資料1「国際基督教大学「オールジェンダートイレ」の視察について（報告）」、資料2「第2回立川市SDGs推進委員会の開催にあたって」、資料3「SDGsに係る社会的な傾向や地域の現状について」、資料4「意識・連携・情報発信の課題解決のアイデアや意見」、資料4別紙1「検討の視点」、資料4別紙2「主なステークホルダーの役割」、資料5「SDGs推進報告書（仮称）」の作成について、最後に参考資料として、「前回推進委員会の会議録」及び「各種アンケート調査結果」をご用意しております。また、本日机上に令和3年度立川市中学生生徒会サミット・小学生児童会サミットに関する資料を配付しております。

資料4のとりまとめにあたっては、皆さまには事前課題のご回答にご協力をいただき、ありがとうございました。

本委員会は、「立川市審議会等会議公開規則」に基づき、公開としております。会場後方に傍聴席を設けておりますので、よろしくお願いいたします。また、会議録につきましては、前回と同様、無記名方式で作成いたします。

説明は以上です。

(委員長)

ありがとうございました。ご質問や資料の不足等はございますか。

(委員長)

特に無いようですので次に進めたいと思います。それでは皆さま次第をご確認ください

い。私から本日の流れについてお伝えいたします。

まず、次第1では、国際基督教大学への視察について報告があります。その後、次第2と3では、第2回推進委員会の開催にあたって前回の委員会の振り返りについて事務局より説明をいただき、次第4では、「資料4 意識・連携・情報発信の課題解決のアイデアや意見」をもとに、皆さまに事前にご回答いただいたアイデアや意見について、ご議論をいただきたいと思います。最後に次第5では、SDGsに関する報告書の作成について、事務局より説明をいただきます。以上、皆さまよろしく申し上げます。

それでは次第に従いまして進めさせていただきます。次第1より国際基督教大学への視察に関する報告について、事務局からお願いします。

1. 国際基督教大学への視察について（報告）

（事務局）

それでは、資料1をご覧ください。「国際基督教大学「オールジェンダートイレ」の視察についての報告です。前回、D委員よりご紹介をいただいたオールジェンダートイレですが、委員の皆さまから視察の要望を頂きまして、11月25日に国際基督教大学へ視察に伺いました。

視察では、学生部長の加藤教授と管理部管財グループ長の高田様に、教室での講義も含めて丁寧にご対応いただきました。元々は校舎の老朽化、それから女子トイレが不足していたといった課題があり、その改修に合わせてオールジェンダートイレを設置したとのことです。

設置にあたっては、様々な課題も挙げられていましたが、「自分はこのトイレを利用したときに抵抗があったが、マイノリティの人が今までどのような気持ちで男女別トイレを使っていたのかかわった」という学生の声もご紹介いただきました。

裏面をご覧ください。いくつか特徴的な点について写真を掲載いたしました。加藤教授からは、ジェンダーレスでは「性の無い」という意味になってしまう。性別を無くすということではなく、全ての性別を包含するといった意味を込めて「オールジェンダー」と定められたとご説明がありました。

報告は、以上となります。

（委員長）

ありがとうございました。実際に視察に行かれた委員からご感想など伺いたいと思います。いかがですか。

（副委員長）

壁も中も白で統一されて、とても清潔感がありました。このような切り替えをした所になかなか勇気がいっただろうなと感じました。もう少し導入の過程が知りたかったなと思いましたが、これからはこういったことが普通である時代が来て、皆がともに生活する上でのヒントをいただいたような気がします。

（委員長）

私は社業が建築のため、トイレ内に突きあたりが無いつくりですとか、周遊ができるつくりというのが、非常に新鮮でした。また、扉を一枚隔てると通常の男女別トイレに区分けることができる、何かイベントがある時には男性用と女性用に分けることができ

るという事を聞いて、先の先まで考えられているなど、大変勉強になりました。
他にはご感想などございますか。

※質問等なし

それでは、次に進めさせていただきます。

2. 第2回立川市SDGs推進委員会の開催にあたって

(委員長)

次第2「第2回立川市SDGs推進委員会の開催にあたって」、事務局より説明をお願いします。

(事務局)

それでは資料2「第2回立川市SDGs推進委員会の開催にあたって」をご覧ください。こちらは、前回の委員会で皆さまからご紹介をいただいた、各団体等における取組の課題やご意見、前回の委員会を通じて抽出された課題等を事務局でまとめたものです。

SDGsの推進にあたっては、資料の右上の図の通り、地域や各団体に共通して3つのテーマ「意識」「連携」「情報発信」の課題があることがわかりました。これらの課題については、相互的な関りや、取り組む主体によって優先順位や役割が変わるとの特徴があることから、図においては円環でお示ししています。また、SDGsを推進する上で、連携の強化や情報発信の重要性に関するご意見が多くございました。

説明は以上です。

(委員長)

ありがとうございました。ご質問、ご意見などございますか。

※質問等なし

それでは、次に移らせていただきます。

3. SDGsに係る社会的な傾向や地域の現状について

(委員長)

続きまして、次第3「SDGsに係る社会的な傾向や地域の現状について」、事務局より説明をお願いします。

(事務局)

それでは、資料3「SDGsに係る社会的な傾向や地域の現状について」をご覧ください。前回の委員会では、意識・連携・情報発信といった課題が導き出されましたが、全国や多摩地域と立川市の状況を比較した場合に、こういった傾向があるかを検証するため、事務局では各種アンケート調査結果を分析しました。今回参考資料としてお配りしております各種アンケート調査結果、こちらの冊子を基に分析しております。

資料3をご覧いただきたいと思いますが、大きく3つのアンケートに分けております。まず、全国を対象としたアンケートですが、こちらでは、10代の男女についてSDGs

の認知度が最も高く、ともに7割を超えていることがわかりました。

また、多摩・島しょ地域を対象としたアンケートでは、SDGsに関する行動をしたことがある割合は低い一方で、今後行動したいという回答が増えています。

次に立川市の状況ですが、環境に配慮した取組についてアンケートを取っていて、既に9割程度の市民が行動しているといった結果になっています。既に取り組まれていることが、SDGsのゴールに結びついている、貢献しているといった実態が明らかになりました。

また、地域貢献したい市民の割合は62.3%であり、SDGsを通じて身近な取組を周知することで行動の活性化が期待できるという分析になっています。詳細につきましては、お時間がある時に、参考資料の各種アンケート調査結果をご覧くださいと思います。

説明は以上です。

(委員長)

ありがとうございました。資料3についてご質問等ありましたらお願いいたします。

※質問等なし

4. 「地域や各団体で共通する課題」に対するアイデアや意見の交換

(委員長)

ご質問等もないようでございますので、続いて、次第4「地域や各団体で共通する課題」に対するアイデアや意見の交換をしたいと思います。資料4と別紙1～2を参考としていただき、ご自身のアイデアやご意見についてのご紹介、また他の委員のアイデアやご意見で、詳しく伺いたいなど、お時間内でご自由に意見交換や質疑応答いただきたいと思います。

まずは資料4をご覧ください。意識、連携、情報発信ということで、皆さまからご意見いただいておりますが、まずは意識の課題についてご議論をお願いします。

○意識の課題に対するアイデアや意見の交換

(委員長)

意識の課題については、子どもたちに意識付けをしていく仕組みを作った方がいいというご意見や、窓口を作っていくというご意見が多くありました。

A委員からは、やはり子どもたちに対するアピールというか、教育の必要性についてご意見いただいているんですね。長期的な視点で考えた場合にということですが、A委員から補足などいただけますか。

(A委員)

はっきり申し上げまして、SDGsについては、あまりご高齢の方に言っても効果が見込めないのかなというのが私の意見です。やはり小さなお子さんと若者に、ビジュアルでわかるような表現を使ってわかりやすく訴えることが出来たらいいなと思っています。ですから音楽も有効だと思います。

(委員長)

視覚・聴覚に訴えるという事ですね。ありがとうございます。

B委員はいかがですか。子どもや中高大学生の取組み支援強化ということですが、どういった形で意識が高められたらいいかご意見や補足がありましたら教えていただきたいと思います。

(B委員)

次世代の子どもたちというのがありますが、親世代や、おじいちゃんおばあちゃん、子どもや孫が取り組むことに興味を持って下さると思うので、ターゲットとして有効ではないかという視点で書かせていただいております。

企業からは「取り組みたい」だけでなく、「取り組まねばならない」といったご相談がある場合もありますが、取り組み方がわからないといった方のニーズのために広くスタートアップの相談窓口が開設されると取り組みやすいと思います。

(委員長)

ありがとうございます。子どもをきっかけに広がっていくということですね。子どもたちへの取組ということでは、C委員はどうでしょうか。

(C委員)

情報発信の議論でまた詳しく話しますが、子どもたちの意識について、SDGsという言葉がだいぶ浸透しているなど感じています。12月に開催したサミットでSDGsをテーマとしましたが、少し難しいのではないかとその思いが最初はありました。しかし、子どもたちは様々な身近なところから自分の活動に結びつけて意見を出していましたので、個人差はあるとはいえ、意外と意識付けは出来ているのかなと思いました。

ただ私たちの方でも更なる意識付けや、実際に活動して行く場面というのは増やしていければと思います。当然教育現場だけで全て叶うかというとそうではありません。本日お集まりいただいているそれぞれの団体の中で、子どもたちへの意識付けをどう具体的にできるのか、それぞれが目指すゴールに向けてどういった取組をするかを提案していただけると、子どもたちには紹介しやすいと思います。

(委員長)

ありがとうございます。机上配付していただいた資料について、後ほど、ご説明していただくということですね。お願いします。

D委員に伺います。学校では、こういったことをやっていった方が良いという意見はありますか。大人向けでも子ども向けでも結構です。

(D委員)

サークルのメンバーとSDGsについて話した時に、自分の行動の何がSDGsに結びついているのかわからないという意見があり、それに対しては、認定員を作り、「あなたのこういう活動がSDGsですよ」と認めてもらえるような制度があったらいいのではないかという意見が出ました。

(委員長)

それは学生たちが自分で認定員をするということですか。

(D 委員)

学生ではなく、公的なものとしてあると面白いのではないかとの意見です。

(委員長)

ハードルは高いかもしれませんが、たしかに認定証のようなものがもらえると、これでいいんだという後押しになりますね。

先ほど B 委員から企業というワードが出ましたが、E 委員は社内で意識付けについての課題や、それに向けて取られている対策などがありますか。

(E 委員)

前回私たちの取組についてお話をさせていただいたときに、サステナビリティに関する従業員の意識付けというところは、本社がスウェーデンであることもあって、今の社会に比べると、ちょっと前から始まっていたのかなと思います。

どういうところから始まっているか考えると、従業員への意識付けについては、「どうして」という、いわゆる“Why”の部分ですね。どうしてこういう事をやって行かなくてはいけないのか、それを毎年リピートして行く。その繰り返しが一時の盛り上がりではなく、10 年以上続いています。さらに毎年トピックの深みを増しています。

最初は 1 つ 2 つしかなかったトレーニングの内容が、今は 10 個以上になっています。皆さん初めは何もないところから、何が SDGs に結びついているのかもわからないまま、サステナビリティという言葉から入って行って、もっと知りたいという欲求は誰しも持っているので、そういったところへどんどん答えていく様なアプローチが実践されているかなと思います。

(委員長)

情報発信にも関わってしまうのですが、マネージャーの方が社内社外へ発信していくのは必要だと思います。知ってはいてもなかなか取り組めない社員もいらしたりするのですか。

(E 委員)

そうですね、社員もどんどん変わっていく現状もありますし、社として大きく意識付けする機会というのは年に数える程度です。ただやはり、日々の刷り込みということで、一番近くで働いている直属のマネージャーが、日々の行動の中からこういったことがサステナビリティに貢献しているということを、部下との普段の会話で持ち出す。そこで得られる気付きが連続することによって普通のことになる。そのため、伝える力の育成、意識を高める人とそれをリードして行く人の育成をしています。

(副委員長)

意識付けはそう簡単に解決できないですね。どの様にして解決していくかは目標を持たなくてはならないと思います。SDGs には 17 のゴールがありますが、私たちは今ゴール 11 とゴール 12 の活動をしています。なぜこのゴールにしたかという、他人

事ではなく自分事として捉えるSDGsの活動をしようと考えたからです。

誰かがやってくれるからではなくて、自分で何ができるかです。今日は大山小学校の公開講座だったのですが、そこではまちづくりをテーマに、砂川地域がどうしたら良くなるか、立川市をどう良くするかといった研究課題がありました。これはまさにゴール11です。研究では、子どもたちが、高齢者の方や子育て世帯、若者といった方に万遍なく取材をしました。半年間かけて研究していた所に私たちも支援をさせていただきました。

講評をお願いされていまして、「今これから取り組もうとしている世界的な目標であるSDGsの推進を、あなたたちはもうスタートしているんだよ」とお伝えをしました。そういう関わりを学校は学校だけではなく、地域と一緒にやってやるのが大切です。

私たちは食品ロスの問題やごみの問題、例えば余分なものを買わないことやエコバックを持って歩くといった日常生活で欠かせない食べ物に関することから取り組んでいます。余るような買い方をしない。余ってしまったらどうするかを考える。近所に分ける、料理の仕方を考えるという、そんな目標を目指す仲間を増やしています。

やはり一人ではできないことなので、皆が自分事としてとらえることが一番大事です。地域の持続可能性は皆で考えなくてはいけない。

子どもたちには、教科書で習うからやらなければいけないとか試験に出るから覚えなければいけないとかではなく、地域と学校が連携して子どもたちと一緒にやれる自然的な学びを大事にしてもらいたいと思います。

今日の公開講座で、子どもたちが、自分がどういう意識を持ってこの地域に住んでいくか、地域を愛する心を育てなくてはいけないという発表をしたときに、これが地域づくりの第一歩だと講評をいたしました。

大山小学校は老朽化していて、非常に汚れが目立ちます。壁やプールなどは地域が修繕を手伝いました。体育館の壁が汚かったので、子どもたちの希望で壁に絵を描くことも地域で支援して実現しました。子どもが気付いて周りが支援する事が、自然にできるSDGs、上から抑えつけ、押し付けるのではなくやって行くことがいいと思います。

高齢者の方には身近なごみの問題を取り上げて、自分たちが生ごみから作った肥料を学校の花壇に撒いて花を育成します。本当によく育ちます。肥料が撒かれた花壇と撒かれていない花壇を見せて、違いを実感してもらう。やはり、相對するものを実際に見せて必要性を伝え、少しずつ意識を高めていくことが良いと思います。

大人と子どもがそれぞれできることを意識して、地域はそれに参加してお手伝いする、ボランティアをする。そういう循環を子どもたちに伝えていきたい。肥料を使って子どもたちが作ったカブや大根をもらい、どう料理したかアンケートに答えました。それが自然と学べるSDGsだと思います。

(委員長)

立川青年会議所は、2017年からSDGsを活動に入れ込みましたが、本当に最初の意識付けが全く上手く行かず、青年会議所のメンバーに話しても全く伝わらない、外部の方に話してもSDGsという言葉がそもそもわからないといった状態でした。まだメディアも取り上げていなかったのも、そこでどうしようかと考えた時に、身近でできるSDGsをPRしていこうと考えました。海洋プラスチックの問題と言ってもピンとこない人が多く多い。「僕らの商売に関係ない」と言う方もいました。

身近でペットボトルをちゃんとリサイクルに出そうとか、不燃ごみの出し方を教えたり、こういう事でも貢献できますよねと、じゃあ使わないコンセントを抜きましょとか、電気を1か所消しましょとか、こうした草の根運動から始めました。

青少年に対する育成事業では、立川青年会議所のOBの方が運営する武蔵村山市の保育園で、「園児にもわかるSDGs」ということを目的に、すべてひらがなで書いたチラシをつくり、そういうところから親御さんにも広めていきました。最近では、ようやくメディアで取り上げられ、市民の皆さんにSDGsが広まっていったかなと感じます。

まだまだ取組に対しては、何が正解か不正解かはわかりません。紐付けをする作業がなかなか上手くできないという方も多くいらっしゃいます。これはSDGsになっているというのを、次のステージは意識もプラスしてお伝えして行かなければいけないという事で活動しています。例えば、食育の部分で、昨年子ども未来塾を立川市でやらせていただき、食材を収穫するところから始めて、料理を作って自分達でPRして売っていくという「生きる力」というテーマでやらせていただきご好評いただきました。そういう実体験に基づいたSDGsが今後必要になってくるのかなと思います。紙を見てこれがSDGsと説明を受けてもピンとこない。色々と意識付けしていけたらと思っています。

(A 委員)

先ほどの副委員長のお話がすごくいいなと思いお聞きしていました。最近のお子さんはテレビのインタビュー等を見ている、とても語彙が多くて利口な子が多いなと思います。D委員も言っていた「SDGs認定員」のお話で思いましたが、一つの小学校内で完結することでもいいですが、ポイントであるとかスタンプをつくり、有効活用できればお子さんはそういう事が大好きですし、前に進めるのではないかと思います。

それと、少しマイナスな話になりますが、私は文章を書くグループを作っていて、一部の方々は今までそういう事をなさっていなかったからか、文章を書いている、ニュースで言っていた、新聞にこう書かれていた、あの人がこう言っていたというものになる。もちろん個人差はありますが、そうでない方との意識の違いをすごく感じています。

(委員長)

ありがとうございます。ではお時間となりましたので、次に進めたいと思います。

○連携の課題に対するアイデアや意見の交換

(委員長)

続いて連携に関する課題について、皆さんから共通して多かったのが情報交換の場とか相談窓口があるといいといったご意見をいただきました。子どもたちへの意識付けとか、子どもたちにも取り組みを考えてもらったといったご意見もありまして、講演会についても私とかD委員からご意見させていただいております。

連携は色々な要素が絡み合っていることも含めご意見いただきたいと思います。個人と個人もありますし、企業と企業、企業と行政、行政同士とか団体同士とか、青年会議所は地域の皆様と連携していただいたり、学校と連携したり、色々と手を尽くしてSDGsを始めとして活動させていただいています。連携に関しては、一つ情報を共有することがテーマになってくるのかなと思っています。

E委員、企業から見て難しいなと思っているところとかあればご意見いただけますで

しょうか。

(E 委員)

企業として地域社会に貢献しようと思ったときに、SDGsにもたくさんトピックがあって、そのどれが一番立川市で問題なのか、どこに力を貸して欲しいのか、ここにサポートが欲しいという事をどなたに聞いたら良いのかが一番困りました。トピックがやや縦割りだと思います。そのトピックを担当している方々は、もちろん自分の担当が一番重要でしょうし。色々な問題があっても、何が一番解決しなければいけないことで、サポートがいる事なのか、知る糸口がいまだにきちんと見えていません。

データを見て自分たちなりの解釈をして、これをフォーカスしてやっていこうという物は作っていても、それが地域に合っているかは未だに疑問があります。そういったときにどういう連携をして行こうかなというのが課題であり、今日の委員会等を通じて逆に何かアドバイスがあればぜひ伺いたいと思っています。

(委員長)

実際にE委員はSDGsをテーマにしたもので共催とか、何か企業や個人、行政と一緒に実施した取組はあるのですか。

(E 委員)

共催とか協賛というより、とあるテーマでこのような会を開催するので、取組を紹介していただきたいというような依頼を受けます。ゲストに対してお話をするというのが一番多いですね。

学生さんに向けては、大学のゼミでSDGsをテーマにしているところにゲストスピーカーとして伺うとか、小学生に対しては例えば男女平等に関する授業にゲストティーチャーとして関わらせていただくといったことをしています。

(委員長)

ありがとうございます。D委員は、サークル活動等されている中で、連携して実施したことや、これから取り組んで行きたいことなどございますか。

(D 委員)

私はユネスコクラブというサークルに所属していて、SDGsに関する勉強会をサークル内や他大学と実施しています。

そこで出た話では、大学生の持続可能な社会への貢献の例として、都内のある地域で、高齢者の単身世帯と大学生をマッチングして一緒に住むといった取組がありました。大学生にとっては、下宿の負担を減らすことができ、高齢者にとっては日常の見守りをしてくれる人、食卓をともにする人ができます。課題はあると思いますが、こういったマッチングが上手く拡大していけば持続可能な社会の貢献になるのではないかと思います。

(委員長)

大学同士での連携はありますか。

(D 委員)

大学同士という大きな枠組みでの連携ではありませんが、私の所属する国際基督教大学のユネスコクラブでは、他大学にあるユネスコクラブとの連携をしています。

また、国際基督教大学では「SDGs 推進室」を昨年 12 月に設置し、そこで発信や推進に取り組んでいます。

(委員長)

ありがとうございます。子どもたちも既に認知し始めていると思いますが、C 委員もいろいろと取り組まれている中では、連携についてこういった課題がありますか。

(C 委員)

連携についてですが、それぞれ学校の教育課程の編成は、学校長の責任のもとに行われております。各学校の目標等に準じて、様々な連携先を提供したり、学校ごとに見つけていたりしています。例えばゴール 7 の「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」という目標であれば、ガス会社や電気会社をゲストティーチャーとして招き、他にも医療機関と連携したがん教育や、助産師と連携した性教育などを、連携して実施した事例もあります。

色々な連携先からアプローチがあったときに、随時学校へは情報提供しています。そこに SDGs という視点を含めて、情報提供するような意識も必要かなと考えています。今回の SDGs 推進委員会の情報も学校へ伝え、連携を深めていければと考えています。

(委員長)

ありがとうございました。F 委員は連携について、何かご意見などございますか。

(F 委員)

この推進委員会が、まずは良い連携の機会になっていると思います。それぞれがやりたいことや得意分野があり、それぞれの不得意を連携によってカバーしていく。そういう意味では、行政は幅広い情報を持っていることが特徴です。本委員会の事務局を企画政策課が担当していますが、企画政策課は全庁的な情報を集約して業務を進める部署でもありますので、行政をどんどん活用していただきたいと思います。「こういった事業はありますか」「こういった取組をしている方はいますか」といったように、行政を使っていただければ、いろいろな方をつなげることが可能です。

反対に行政としても様々なことを皆さまにお願いする場面があります。お互いに得意なところを生かし合うことが連携では重要なところかなと、お話を伺っていて思いました。

(委員長)

ありがとうございます。やはり情報が集約できるところがあると良いと思います。

B 委員に伺いたいのですが、連携の規模感による活動コーディネートとはどのようなものでしょうか。

(B 委員)

SDGs は暮らし全般を受け止める力がある取組・キーワードだと思います。何か連

携して取組みましようとの話になったときに、例えば大企業とまちの商店では、せっかく面白い取組ができるのに、最初に相談するときに話がかみ合わないことがあります。相談する側からすると、自分の規模感に合わせて応じてくれると取組みやすいだろうと感じているところです。

私どもがなぜ連携に取り組むのかというと、貧困等地域の福祉課題について自分事として取り組む人を増やしたいというのが、究極の目的です。その時にどうしても福祉の看板だけでいくと、そこにたどり着く人が狭められてしまいます。SDGsというキーワードにはそこを広げられる可能性がたくさん含まれている。そこは突破したい、課題解決したいというところにつながっています。

市民活動センターで実施しているヒューマンライブラリーという企画があり、LGBTQの方や障害のあるお子さんがいる親御さん、薬物依存の経験があるといったいわゆるマイノリティの方が、「人の本」になって、自分を貸し出すといった取組で多様性を理解しましょうという企画なのですが、ちょうどイケアさんと取組ませていただくこととなり、IKEA立川ストア内で開催させていただくこととなりました。イベントの内容が同じであっても場所が違くと広がり方が全然違うと考えています。そこにすごく連携の可能性を感じています。

意外な広がりというか化学反応が起こるようなことを連携で目指せばいいと思います。

（委員長）

起こり得るのに、目指しているところやステージが違くと話がかみ合わないというところは確かにあります。そういったところが上手く連携できればいいなと思います。

（A委員）

今のお話で、場所を変えると気分や雰囲気が変わって、今まで出てこなかったことが出てくる、起きるというのが、確かにそうだなと思います。四角四面の中でやっても、それ以上広がらないというのは皆さんも経験されていることだと思います。

（副委員長）

連携って、単につながればよいということではないと思います。

私は一つ一つの自分の周りのでできること、17のゴールの中で何ができると考えたときに、ゴールの7、電気の節約、不要な電気の消灯、トイレのふたをきちんと閉めるだけでも、年間でどれだけの電気量が違うとか、そういうところを仕分けしながらグループを作って連携をしていくことが良いと思います。

例えば5～6人のサークルでどうやって自分たちのエネルギー問題について考えていかなければならないか。じゃあ、地域づくりは7～8人のグループでどのような地域をつくりたいかを発想する。

それと、もう一つはパートナーシップ、自分たちに足りないところをどの企業と手を組んでSDGsに取り組めばいいのか。また、コロナウイルス感染症のために失業してしまった人のためのパートナーシップなど、そういうグループを作って、1年に何度かグループ全体で連携しながら議論をしていく。そういうものが市の中にできればいいと思います。

そのために窓口を作って欲しいというのが私の大きな願いです。そして、グループご

とに活動していけば、その中でリーダーが生まれます。リーダーという人材の確保につながります。何事もリーダーがいて、引っ張っていくことが必要です。

そういうつながりから発生したリーダーを見つけて、プロデュースできるようなどころまでの連携ができれば、これから何十年先も見据えてやっていける連携ではないのかなと思っています。なので、子どもたちにもとにかく実践です。実践を通じて何がSDGsなのか、顔を見ながらつながりを作ってあげられるような、教科書や試験だけでなく、実際に心に感じられるようなつながり、自分自身の未来をつくるために学ぶということを教えていければいいと思います。それには先ほどのグループに子どもも巻き込むことが効果的です。子どもの意見は素晴らしいです。

私たちもペットボトルのふたを集めるだけでも、こういったことにつながっていくことを、今子どもたちから提案されて、自治会で集めて学校に寄付しています。リサイクル事業で新聞やアルミ缶を集めると学校の子どもたちの教育にこんな風に使ってもらえるんだよといったようにPTA等にも協力を促しました。

近くにあるものを利用しながらグループができていけば、それをあとはつなげるだけ、その窓口が行政にあればいいかなという気がしました。そこから物事を考える力も湧いてくるので、その中で人材の確保もできるといった連携が必要じゃないかと思っています。

(委員長)

どこが窓口になるかというのは非常に課題が多くて、情報があるだけでもだめで、やる気があるだけでもいけない。

近隣にSDGs未来都市に選定された相模原市があるのですが、立川青年会議所で一度講演に呼んでいただいたことがあります。最初は1人でSDGsの取組を始められて、今は4人くらいの係が選任でSDGsに取り組んでいるそうです。SDGsの窓口、外部からの問い合わせもそうですし、市内のSDGsの活動をどうやったらいいかの問い合わせにも応じています。一番多い仕事は、問い合わせに対するアンサーで、「この企業がこういった取組をしているので、紹介します。」といったことを業務としてやられています。

実は八王子の青年会議所のOBで、それを民間で仕事にした方がいて、コンサルティングと企業団体の紹介をメインにビジネスにしました。SDGsが2030年になくなったとしても、環境に対する取組みや地域に貢献する取組みは、続けていかなければならないので、ビジネスとして立ち上げたそうです。

近隣だと国立市もこれからどんどんSDGsを扱っていこうということで、近隣の企業で集まって企業主体で取り組んで行こうという動きがあります。

その自治体やステージにあった形で情報共有の場が地域に何かしらあることが、非常に良い課題の解決につながります。立川青年会議所もその一助を担っているがまだまだ情報量が足りないので、今後も継続していきたいと思っています。

お時間になりましたので、情報発信の議論に進めたいと思います。

○情報発信の課題に対するアイデアや意見の交換

(委員長)

情報発信に関するもので、皆さまから様々ご意見をいただきました。例えばB委員からは、キャンペーン期間を設けた一斉発信をするのご意見。副委員長やF委員からは優良事例の広報による発信、A委員からはSDGsをロゴ化してはどうかとの意見もい

いただいています。

私はSDGsの発信について、実はこれが一番難しいのではないかと個人的には思っていて、しっかりと広報ができないと、取り組んでいても結局は何をやっているかわからないというところにつながってしまうと思います。

B委員にお尋ねしますが、情報発信ということで、キャンペーン期間を設けて一斉に情報発信すること、それから、活動の主体と活動を知った方の双方を紹介するということ、少し連携の視点も含まれると思いますが、お伺いできればと思います。

(B委員)

SDGsの取組については、実は今すごく盛んで、それぞれの方がいろいろなことをやって発信されていると思いますが、立川市として、市のブランド力を高めるであるとか、SDGsに前向きであることをアピールして、そういうまちに住みたいと思う人が来てくれるような効果を狙うには、様々な市内の方が一緒に同時に発信することがあっていいかなと思います。また、それぞれが発信することに対して、それを客観的に「いいね！」と思う人が、「いいね！発信」をしてくれる、客観視したことを紹介してくれると、さらに噛み砕いて共感の輪が広がっていくと思います。

そこでSDGsリポーターと書かせていただきましたが、子どもでも面白いし、何か挑戦してみたいご高齢の方にお任せしても面白いと思います。

A委員が前回の委員会で発信することが苦手な層がいるとおっしゃっていましたが、せっかく良い活動をしているのに、伝える力がまだついていない人に対しては、伝えることが得意な人が代わりに伝えてもいいのかなと思いました。

(委員長)

ありがとうございます。どうしても発信が苦手な方はやはりいますからね。それをサポートすることは、連携でもありますね。A委員、今のご意見についてどうでしょうか。

(A委員)

実は私が苦手なことでもありますが、SDGsのロゴ化についてと、それぞれゴールの意味を高齢者の方にもわかりやすく、日本語に可能な限り訳して表現すると書きしました。個人的なことを例にあげさせていただきますが、先日ようやくガラケーからスマートフォンに変えまして、とあるスマートフォン教室に何度か通っています。

そこでは、この単語は当然知っているよねという感じでどんどん進んでいくんです。知っているふりをして話をきいていましたが、家に帰って一生懸命調べてようやく理解しました。

情報発信という視点では、自分が知っていることは相手も知っているだろうとは思ってはいけないと感じました。

(委員長)

ありがとうございます。

実は、昨年TMC（多文化共生センター）さんに出向させていただきました、「優しい日本語」について、1年間勉強をさせていただきました。そこでも伝えることの難しさをやはり再確認いたしました。

E委員は、企業として情報発信についてはどうですか。

(E 委員)

先ほど、発信力があるマネージャーを育成するとの発言をさせていただきましたが、さきほどは社内向けにどうしているかをお話しました。社内も大事ですが、やはり企業としてもっと大事なのは外に向けて発信する人材の育成です。社内をリードしていく発信ができる人材の育成も難しいですが、もっと難しいのはやはり外向けの発信です。それこそ皆さんがおっしゃっているようにわかる言葉で伝えること、興味を持っていただくような内容を構築して伝えていく、伝える技術・伝える力ですね。

こうした取組を進めていきたいと、この場では発言させていただいていますが、こうした人材を社内で育成することがやはり課題です。伝える技術や力を備えた人材の不足で、そのうち何か発信してくださいと言われても断らなくてはいけないというようなことが起こるのではないかと考えています。

(委員長)

コミュニケーション・アンバサダーと記載をしていただいた部分ですね。人を育てるといったところでも、力を使って広報をしていかなければならない。

(E 委員)

そうですね。ただ知っているだけだと、その人が発信できるかといえばそうではない。人前で話すとなれば、また違った角度でのハードルもあると思います。そういったところも合わせて、社内でこういった機会をつくり練習できるような土台をつくるか。また外に向けて発信する機会を与えるかは課題であり、これから取り組んで行かなければならないことだと思います。

(委員長)

先ほど、意識の課題のときに、マネージャーの方の発信力とのお話がありましたが、マネージャーという役職の方は何名かいらっしゃるのですか。

(E 委員)

コワーカーという役職を持たずに働いている人がいて、コワーカーを率いる人をセカンドラインマネージャーと呼びます。またセカンドラインマネージャーを率いる方もおり、その方々にも皆さんマネージャーという肩書がつきます。そのため、何かしら率いる役職をお持ちの方を今回マネージャーとして総称してご紹介しています。

それぞれに導く対象が違うので、相手に合わせて言葉を選んでわかるように伝えなければ効果がありません。マネージャー同士は少しハイレベルな内容で会話してもいいと思いますが、そうでなければやはり伝える対象を意識しなければなりません。

(委員長)

選任でやられているわけではないんですね。

(E 委員)

5～6年前まではサステナビリティマネージャーという役職を選任していました。現在は、全社員について、サステナビリティを理解していない人がいないくらい浸透していますので、選任ではありません。

日々の仕事がサステナビリティのどこにつながっているのか、扱っている商品がどのようにサステナビリティの要素を持っているか、サステナビリティが特別なものではないという状態にするためには、繰り返しが必要で、何か特別なミーティングや会合を開くのではなく、日常で気付きを与える意識付けと、やはりそれを発信する力が大切だと思います。

(委員長)

こういったことはSNS等でも発信はしているのでしょうか。

(E委員)

SNSによる発信をしています。あとは、ストア内でも商品に結び付けた発信をしています。商品として扱っているものは生活に身近なものなので、それを通じてお客様にも感じ取ってもらうことを目指しています。

(委員長)

ありがとうございました。D委員は、サークルや大学で活動されている中での発信における課題はありますか。

(D委員)

課題ではありませんが、大学の発信で面白いと思った取組があります。「icu confessions (アイ・シー・ユー・コンフェッションズ)」という取組で、大学のヘルスケアオフィスの職員の方々が運営してくれているインスタグラムアカウントなのですが、学生が匿名で今何を考えているかを自由に告白する場となっています。そのアカウントが本当に人気で、フォロワーが1,000人以上います。

他にも大学の情報発信の場として有意義なものとして、学園祭での発信があります。私のサークルでも、日韓関係やテレジソ収容所での出来事等を学生に向けて発信し、巻き込んで議論をしました。

そういう場でSDGsをテーマとして発信すれば、たくさんの学生が集まる場なので、効果的だと思います。

(委員長)

インスタグラムでの匿名の告白は、話のレベル感は決まっているのでしょうか。

(D委員)

話のレベルもジャンルも決まっていません。恋愛の悩みであったり、就職活動の悩みであったりと様々です。

コロナ禍によって学生のつながりが薄くなってしまっているからこそその取組だと思います。たまに、こういう活動をしています、こういう仲間がほしいですといった投稿もあり、「いいね！」すれば興味を持っていることが伝わるので、若者向けに情報発信する際には有効だと思います。

(B委員)

実際に、活動や仲間を探している人については、何かコーディネートしてくれたりす

るのでしょうか。

(D 委員)

そこはまだまだ課題です。コメントはできますが、投稿自体は完全に匿名でニックネームが設定できるくらいです。だからこそいろいろな人が本音で投稿する場なのだと思います。

告白することで自分の問題意識等が発信されてくるので、これを市民の声を拾う場として応用しても面白いのではないかと思います。

(委員長)

現状では、仲間探しに「いいね！」があった場合に、どうアピールするのでしょうか。

(D 委員)

「いいね！」をした方のアカウントがわかるので、投稿した方が、自分のアカウントからダイレクトメッセージを送ってつながることができます。

(委員長)

ありがとうございます。C 委員から、小中学生のサミットについて教えてください。

(C 委員)

本日机上に配付させていただいた資料の通り、12 月に小学校と中学校の子どもたちの代表を集めたサミットを開催しました。そのテーマが S D G s ということで、それぞれの学校で取り組んでいる、あるいは学級で話し合ったこれから自分たちがこのゴールに向かってこういうことができるよといった内容を各校の代表が集まった中で、情報交換、新しい情報の構築というところの会議をしました。

サミットを開催してみて、子どもたちの意識、事前に課題に取り組む中では、身近なところで S D G s と結びつくことがたくさんあることを実感している子どもたちが多くいました。今後 2 月 6 日に開催を予定している立川教育フォーラムにおいても、サミットについての報告や、各学校で取り組んでいる地域課題を探究的に活動して解決していく「立川市民科」の実践発表を行います。こうした機会を利用した情報発信を目指しているところです。

また、前回の資料にあった「立川市 S D G s 重点取組事業紹介シート」を子ども向けに見やすくするなどして、今後子どもたちが使っている市で作成している社会科の副読本に盛り込むことが可能かを検討しています。皆さんのご意見も踏まえて、子どもたちには身近なすぐ手に取れるような情報発信ができればと思っています。

(委員長)

実際の子どもたちの温度感はどうでしょうか。子どもたちは実際に活動を始めると、みんな楽しくなってどんどん取り組んで行くと思いますが、どんな印象ですか。

(C 委員)

実際、各学校では校内研究を進めているところもあります。教育現場だと S D G s というよりは、E S D（持続可能な開発のための教育）という表現を使いますが、E S D

の取組を2年前に研究している学校があってその時も情報発信をしました。その時の温度感と比べると、全校的にSDGsの取組や考え方は広まりつつあると実感しています。今回のサミットで子どもたちの様子を見ていても、自分たちで実践につながる取組をこれからやっていきたいとの思いを強く持っていました。

それを持ち帰って、それぞれの学校でも紹介していくといったコメントもありましたので、またこの取組は進めていきたいと思っています。

(委員長)

私も小学生の姪から、部屋で暖房をつけて薄着でいたのを、「それはSDGsじゃない」と指摘をされた経験がありまして、立川青年会議所で行っている青少年育成事業でも、SDGsについては、子どもたちの方が理解していると感じました。大人はみんなペットボトルなのに対し、子どもたちは皆水筒を持ってきたということがあり、これはやはり見直そうという話題になりました。

立川青年会議所でも名刺の素材を変えるとといった自分たちでできる取組から始めていますが、やはり子どもたちから教わることは非常に多いです。そういった面では、やはり学校とも連携してやっていきたいと感じます。

(副委員長)

やはりどういうものが事例として発表できるのか、立川市としてはどのような優良事例を紹介するのか、発信するのが大事だと考えました。また、その目的は何か、ゴールはあるのかと聞かれた時に、市としてのゴールを決めてほしいと考えています。

SDGsは何のためにやるのか、いつまでにやるのかを発信するためには、どこかの企業がやるということではなく、一人ひとりが主役であることをわかりやすく発信する。そして、裾野を広げていくことが大事なのかなと思いました。

目標はみんなのため、みんなが支え合う社会が前提で、目標やゴール、期限を決めて、達成していく仕組みをつくって、市民に届けられればいいかなと思います。

それには何が必要かと言えば、市の広報、MXテレビやケーブルテレビといったメディアで宣伝すると良いと思います。何のためにやっているかをわからずにSDGsという言葉だけが一人歩きしないよう、みんなのためである、支え合う世の中をつくるということが一番の目標だと思います。何年度までに達成できるという可能性を示していかないと、ずるずるしてしまうし、名前だけを利用することはナンセンスです。

(委員長)

ありがとうございます。企業でもSDGsの達成目標を示しているところはございます。わかりやすい数字を並べて、期間を決めて、そこまでのプロセスを数か月ごとに示していく。達成できたかどうかというよりも、プロセスを「見える化」することに、広報としてすごく意味があると感じています。

SDGsが目指す2030年に達成する目標を決めるとわかりやすいと思います。

(副委員長)

私たちは、現在、法政大学と中央大学と協力していて、地域を活性化するために何ができるか、学生としては何ができるかをともに学んでいます。今まで知らなかった世界

を知ることになり、お互いに探り合いながら良い刺激になっています。

自分のところだけではなく、パートナーを見つけて一緒に発信することも勉強中です。

(委員長)

連携した発信については、B委員からご意見をいただいた通り、手厚い情報発信になりますね。それではお時間となりましたので、次に進めたいと思います。

○全体を通しての意見等

(委員長)

「意識・連携・情報発信」といった3つのテーマでご議論をいただきましたが、全体を通してご意見やご感想などはありませんか。別の委員さんのご意見に対して、気になる点がありますといったことでも構いません。

それでは、F委員からお願いします。

(F委員)

市は広報やホームページといった情報発信の力が強いとの特徴があります。行政の立場として、すべての方に等しく情報を届けることが命題です。広報は全世帯に必ず配布されるもので、携帯電話をお持ちでない方にも情報が届けられる。そういう意味では強い発信力があります。皆さんからご意見いただく中で、もっと良い取組を紹介したいと、私もそう考えています。行政は、そのお役に立てる力を持っているということをまず感じています。

それからもう一つ、意識について、小学生・中学生のサミットの話です。12月の市議会でSDGsの取組について報告をした際に、子どもたちについては、どのような取組をするのかという質問がありました。その時は、第2回の委員会で色々なアイデアが出るとおっしゃるので、それを参考に進めたいとお答えをさせていただいたところです。そう思っていたのですが、机上配付の資料を見て驚きました。というのも私が考えている以上に、子どもたちの方がよっぽどSDGsを知っているなと思いました。例えば、下級生に勉強を教えることがゴールの4につながるですとか、フェアトレード商品を買うことがゴール10に貢献するという記載があります。さらには、これらを考えたのが小学生であるところに改めて驚きました。

この資料を見た時に、お子さんに発信するよりも、市の職員にしっかりと発信しなければならないと感じました。果たして職員がフェアトレードのことをどれくらい知っているんだろうと思ってしまって、危機感を覚えました。

本来ならば、行政が意識をもって皆さまにお伝えをしたり、発信したり、推進したり、そういう立場であるべきはですが、そういう意味で言えば職員の意識はまだまだ足りないなと思います。先ほど、外向けの発信と内向けの発信の人材育成との話がありましたが、まさにその通りで職員全体の意識を高めていかないと、市民の皆さんにこうやってくださいとはとても言える状態ではないと思います。子どもたちがこれだけ意識高いので、職員は遅れないようにやっていかないといけないと感じました。

(委員長)

E委員からいただいたご意見ですが、人材の育成というのがやはり時間も予算も労力がかかると、企業も行政も団体も、やはりちゃんと説明ができる人をどれだけ育ててい

くか、それはどのステージでも課題だと思いますので、強み弱みを理解して協力しながらできればと思います。

(A 委員)

皆さんの話を伺っていて、小学生の、鉄は熱いうちに打てというか、今行政の方からも話がありましたが、まだまだ大人に浸透していないことは事実かと思います。頑張っていかなければならないと思います。

(E 委員)

SDGsについては、勉強していく中で、未来はより良いものであることを信じて、今何ができるかを起点に考えるとすごく身近なものになると思いました。特別なものを扱うという感覚があり続けることが、まだまだ浸透していない証拠なのではないかと思います。

また、この委員会を通じて、私たちよりも子どもたちの方が本当に先をいっているということを感じました。そこで怖いのが、追いついていない私たちが無意識に偏見を押し付けていないかということです。私も子どもが3人いますが、「男の子なんだから」という枕詞を、言ってしまうと実感します。そういった言葉を家庭で浴びせられると、「男だから、女だから」といった価値観が出来上がってしまう。身近な大人が子どもに対して与えている影響は大きいので、こうした身近な気付きからも、まだまだ可能性があるのではないかと思います。

最後に副委員長がおっしゃっているゴールや期限を決めることは私も賛成です。まず何を成し遂げたいのかというゴールを見せて、それをいつまでにやっていくと、ご意見をさせていただく際にも、より具体的なことをお伝えできるのかなと思いました。

(B 委員)

お話を伺っていて、私は、SDGsの各項目の達成だけが目的ではなくて、SDGsというキーワードや取組を利用して、副委員長がおっしゃっていたような人のつながりが広がっていくであるとか、E委員がおっしゃっていたような人の育成や育ちあいの可能性があるのだなとすごく思いました。なので、SDGsをしようというよりは、SDGsを利用しようといったイメージが湧きました。

(副委員長)

先ほどお伝えした大山小学校の公開講座でのことですが、一組だけ、立川は障害者に優しいまちではないとの発表がありました。どんなところが優しくないのかを尋ねると、「周りを見てもスーパーにいくのに段差や凸凹があり過ぎる、車いすが通る際に危険なコンクリートのひびができています」と話していました。そういう発想から、地域をより良くするためには、健常者も障害者も仲良く、良い環境づくりをしていくとの発表でした。

教育委員会には、そういうことに気付ける子どもを、SDGsを通じて育ててほしいなと思っています。実際に、大山小学校から一つ手前の信号については、車いすの方の手が押しボタンに届かないと子どもたちが発信したことで、信号機が新しくなりました。子どもからの要望が、行政を変え、世の中を変えました。

(D 委員)

感想になりますが、初めてこういった場に参加して、地域のことをすごく考えている方が多くいらっちゃって、大変参考になりました。また、SDGs のゴールの話ですが、ゴールと同時に数字がどう改善しているかが見えれば、やる気がでるといえるか、達成感があると思いました。

(委員長)

それでは、お時間となりましたのでこのあたりで終わらせていただきます。最後になりますが、次第5「SDGs 推進報告書（仮称）の作成」について事務局より説明をお願いします。

5. 「立川市SDGs 推進報告書（仮称）」の作成について

(事務局)

資料5「SDGs 推進報告書（仮称）の作成」について説明いたします。本年度の立川市の取組のまとめとして、記載の通り「立川市SDGs 推進報告書（仮称）」の作成をいたします。

報告書は、序論・本論・結論の3章構成とし、第1章の序論では立川市SDGs 推進委員会の設置経緯や市におけるSDGs の取組の背景等をまとめます。第2章の本論としては、立川市SDGs 推進委員会で皆さまよりいただいたご議論をまとめ、第3章の結論として、これからのSDGs の推進や、報告書の活用についてまとめたいと考えております。

報告書については令和4年1月中に案をまとめまして、委員の皆さまにご確認をいただきたいと考えております。その後3月の市議会にて本年度の取組のまとめとして報告を予定しております。

説明は以上です。

(委員長)

何かご質問等ある方はいらっしゃいますか。

※質問等なし

○閉会

(委員長)

SDGs を勉強させていただく中で、いろいろな講師の方のお話を伺うのですが、その中で非常に感心したのが、「知っていることとしていることは全く別物だ」ということです。

私たちはSDGs やESDについて説明はできても、実際に取り組んでいるのかどうかは一つ課題になるかなと思いました。子どもたちがSDGs を認知していくことが重要とはいえ、大人がそこに胡坐をかいてはいけいない。大人が子どもたちに胸を張れるような地域にすることができればと思います。

以上で、本日予定しておりました議事はすべて終了となります。皆さま本日はありがとうございました。